

古典俳文学大系 7

蕉門俳諧集二

今 宮
本
栄 三
蔵 郎
校

集英社

蕉門俳諧集二

昭和四十六年一月十日 初版発行
昭和五十一年五月三十日 三版発行

校注者 宮本三郎
今 栄 蔵

編集 株式会社創美社

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇

出版部(〇三)二三〇一六三六一
電話 販売部(〇三)二三〇一六七

印刷 大日本印刷株式会社

大文堂印刷株式会社

定価 四九〇〇円

乱丁・落丁本はお取り替えます。
著者との了解により検印を廃止いたします。

目次

解説	三
凡例	一五
諸葱摺 （俳諧）	一九
継尾集 （つぎを）	二六
句兄弟 （くきやうだい）	三三
或時集 （あるとき）	三四
ありそ海・となみ山 （うみやま）	三八
後の旅 （のちのたび）	四〇
熱田 （あつた） 緻宮物語 （しわばものものがたり）	四三
芭蕉庵小文庫 （ばせうあんこぶんこ）	四五
末若葉 （うらわかば）	五五
菊の香 （きくのか）	九一

陸奥衛 むつちうり	二〇四
韻塞 ゐんふたぎ	二七〇
続有磯海 ぞくありそうみ	二九六
勢伊新百韻 せいゐしんひやくゐん	三七七
まつのかなみ	三三一
二えふ集 にえふしふ	三四四
渡鳥集 わたりどりしふ	三九二
三疋猿 さんびきさる	四二〇
国の花 くにはな	四三〇
正風彦根躰 しょうふうひこねがみ	五四二
庭竈集 にはかまどしふ	五七五
三日月日記 みかづきひりき	六〇九
雪満呂気 ゆきまろげ	六三三

解説

本書は主として、元禄七年以降、宝永・享保期にかけて、主要蕉門俳人、其角・嵐雪・桃隣・去来・浪化・許六・支考・越人・惟然らを中心に、或は江戸・尾張・美濃・伊勢・近江・大阪・北越等各地蕉門の主張と作風を跡づけたり、芭蕉没後その統制から解き放たれた蕉風俳壇の動向と性格を窺うに足る諸俳書とともに、また、『奥の細道』関係資料を種々含む点においても意義深い『菰摺』・『継尾集』・『陸奥衛』・『雪まろげ』及び一般的に芭蕉への追慕と芭蕉作品資料の蒐集・紹介を意図した門人たちの編著等を収録した。

以上のごとく、本書は各年代にわたり、各派各種の書を含む関係上、個々の書籍解題を通して、つとめて具体的に俳諧史の流れ、俳諧史的意義、俳壇的背景等を把握し得るよう考慮して解説を加えることにした。

俳諧 菰摺

『俳諧菰摺』は全二巻のうち現存する下巻の巻末に、元禄二年夏奥の細道行脚の芭蕉・曾良主従が奥州須賀川の駅長なる撰者相楽等躬を訪れた折に交歓した作品を収録する一事で、芭蕉研究界に著聞する。本書は、本文の中ほどに「元禄元辰孟冬 東陸於東籬軒等躬撰之」とあるので、元禄元年十月に一旦撰了の後、更に若干の付録を補ったものと見られるが、芭蕉関係の記事はその等躬訪問後ほどなく書き加えられたに相違なく、刊行が元禄二年中だったとすれば、本書は細道途次の芭蕉作品を最も早く公開したものの一として注目してよい（同年八月の刊記ある挙白撰『四季千句』もいち早く細道中の発句三句を収めるが……）。等躬はすでに延宝五、六年ごろ、芭蕉の宗匠立机万句興行に当たって発句を贈って協力した古くからの馴染である。ただし、等躬は終始江戸の岸本調和門に属した俳人で芭蕉にとっては他門の人であり、本書もまた調和系の色彩が濃いものである点は留意すべきことである。

繼尾集

芭蕉は奥の細道の全行程約百五十日のうち通計四十日近くを出羽の国に逗留している。その事情にはいうまでもなく彼を迎えた出羽俳壇の人々の並々ならぬ熱意があった。本来当地方俳壇は江戸の岸本調和系の勢力が強く、仙台の大淀三千風の影響下にもあったが、江戸における新俳風の指導者として名声とみに高まっていた芭蕉を迎えて、彼等の蕉門帰属は一挙に進んだ観がある。更に元禄三年には路通が、五年には支考が、共に芭蕉の足跡を慕って引続いて当地方に来て長逗留し、蕉門化は一段と固まった。酒田の医師伊東玄順、俳号潜淵庵不玉はその最も積極的な中心人物で、『繼尾集』はその結実である。本集の発企は芭蕉来訪のすぐ翌年で、そこに不玉が芭蕉から受けた刺激のほども窺えるが、刊行実現の裏には五年に訪れた支考の強い勧めと事務的斡旋があった。支考は本集の草稿を持ち帰り、恐らく秋冬の間に、この奥羽行脚記念に著述した俳論書『葛の松原』と共に京都で幹旋出版したらしい。

句兄弟

『句兄弟』上中下三巻は上巻の「句兄弟」を取って題号とし、一書の眼目もまたこの巻にある。ここには古今の発句三十九と、これを換骨奪胎した形の其角自作とを番がえて兄弟の句合に仕立てつつ、等類・非等類の論を展開している。その論の自由柔軟且つ的確な点はさすが俊才其角の感があるが、和歌の本歌取り、漢詩の換骨奪胎にヒントを得たこの試みの中で殊に見逃せないのは、漢詩法における「点化句法」の影響である。これは直接的には明の梁公濟著『氷川詩式』から学んだもので、当時の其角はそれから新鮮な刺激をうけ、これを俳諧で実践してみようとした一つの現われがこの句合であったのである。中巻は元禄六、七年の連句十巻、中でも謡物三十六番は句毎に謡の詞章を取ってその意を転化して活かす試みで、上巻と同じ関心の産物である。下巻「随縁紀行」は、其角門亀翁の初めての遠遊に其角以下同門五名が同道し、元禄七年九月六日江戸発足後、東海道・伊勢・大和・紀州を経て十月十一日摂津住吉に至るまでの句日記だが、その最終日、其角がたまたま芭蕉の大阪の旅舎にあるを聞いて訪ねると、芭蕉はすでに重態の床にあり、翌十月十二日、はしなくも師の臨終に侍するを得たのは誠に浅からざる師弟の縁というべきであった。巻末「句兄弟追考六格」の発句分類法も『氷川詩式』に学んだ新着眼である。

或時集

芭蕉が最晩年の「かるみ」の新風をしきりに説いたころ、芭蕉最初期の江戸蕉門嵐雪らはもはやその作風に追隨し得ず、芭蕉から離れて行く傾向があったのみならず、ことに芭蕉の賞美を得、上方蕉門の間にも好評を博した子珊・杉風らの『別座鋪』(元禄七年)の企画に対して、嵐雪一派が難癖をつけ、『別座鋪』上梓に先んじて『露弘』なる一集を急ぎ企てたが、門人氷花の妻の死などの事情でそれが延引した旨を、杉風は芭蕉宛書簡(六月二十)に報じている。該書簡によると、嵐雪一派が『露弘』出版のため俳諧百韻を急に催し、夏の発句五十句を集めたというが、それらやまた氷花の妻とその嬰兒を悼む嵐雪の句文を本書が含む点なども、すべて本書の内容に符合し、この『或時集』こそかの『露弘』の改名出版されたものではなからうかと推定される。発句の部も芭蕉の句は「六月や峯に雲をく嵐山」の一句に過ぎず、巻軸には他門の湖春・露沾の句を挙げるなど、当時の江戸俳壇の複雑な事情を語る稀観書である。

ありそ海・となみ山・続有磯海

浪化は東本願寺第十四世の法主琢如上人の末子で社会的には高貴の出であり、七歳で越中井波瑞泉寺の十一代住職に任じられた。もっとも、二十歳(元禄三年)前後までは特別の寺務ある時のほかは京都に住み、本拠を井波に移したあとも上落することが少なくなかった。俳諧は元禄四年、金沢蕉門の『卯辰集』に初入選して以後蕉風への執心を急速に募らせ、六年か七年に京都で去来と相識るに及んで本格的に蕉門に帰した。その浪化にとって、芭蕉の直門に参することは最大の念願に相違なかったが、折しも元禄七年閏五月、江戸から西上して嵯峨の落柿舎に滞在中の芭蕉と、去来の手引きで初めて面会し入門を許された。「越中の御堂東御門主の御舍弟浪化と申御隠居、御門跡」(この五月二十二日に遷化の十五世東本願寺法主、浪化の異母兄)御遷化に付上京、忌中ながらに去来迄被_レ尋致_二対顔_一候。門人ニ可_レ被_レ成由達而御申候を、色く断り候へ共、さまぐ御断り御申候而門人の約束致候」(六月二十四日付、杉風宛芭蕉書簡)という芭蕉の言葉は、両者対面の様子は心桂となっているが、この人は東本願寺の一僧官と言われ、浪化の請託を受けて撰じたものと見られる。しかし浪化が最も情熱を燃やしたのは、やはり『ありそ海・となみ山』の撰集で、その発企も芭蕉対面以前で、始めから去来の後援を強く求めた。元禄七年

五月十三日付の浪化宛去来書簡（いわゆる『去来文』）は、それに対して綿密な意見を述べており、また去来はその翌日付で江戸の芭蕉に宛てて本集入集句に関し、諸家の作品を具体的に示して取捨の相談の手紙を送るなど、編集活動はこの頃から積極的具體化の段階に入ったことを窺わせる。前記杉風宛芭蕉書簡に「就其、有曾海集急く御仕立、門人の発句共、去来被頼少づく取集候間、其元より御よせ可被成候」とあり、本集は芭蕉の側面的支援をも受けた。『去来抄』によれば芭蕉は、「ありそ海・となみ山」は共に和歌の名所だから俳書の題号にはふさわしくない、単に「浪化集」とする方がよい、との意見も述べたという。あえて、それを変えなかったのは、浪化が本集の巻頭を芭蕉の北陸における「早稲の香や分入みぎは有そ海」の句を以て飾ることに決定的な魅惑を感じていたことに外なるまいが、題簽中には「浪化集上（下）」と小書きを加えて芭蕉の意を生かしている。本集の出版は芭蕉没後となったが、終始一貫した去来の尽力の結果、上巻巻頭が丈草の序文、下巻巻頭が其角尽力の「刀奈美山引」や「表」や江戸蕉門四季発句選によって飾られたほか、広く蕉門有数俳人の作で満たされ、且つ芭蕉晩年の風をよくとどめ得て、代表的な蕉門撰集となっている。北陸の作者はむろん浪化と交渉ある蕉門だがその数は意外に少なく、その他各地の蕉門を広く集め得ているのは専ら去来の勧誘によるものである。浪化の蕉門における地位は本集によって定まったと言えよう。十一年刊の『続有儀海』はそうした浪化が辺境の井波に在って「時々文通に聞えわたる」蕉門の佳句を集めたもので、集の部立を『和漢朗詠集』のそれに拠った所に新趣向が見られる。北陸作者は前集の倍を越えて、彼がこの地の俳壇に漸く根を下した観があり、その後十四年に、支考・万子と共撰で北陸色の極めて濃厚な『そのの花』を出版するが、同十六年三十三歳の若さで遷化した。

後の旅

尾張とともに美濃は芭蕉との因み深い土地であるが、美濃蕉門の中心大垣の近藤如行に宛てて、細道行脚中の芭蕉は加賀山中温泉から一書を寄せて（元禄二年七月二十九日付）、旅の日程を報じ、八月下旬には、如行亭に草鞋を解いた。そしてやがて伊勢へ向かう師を如行らは舟で送りなどした間柄で、本集は芭蕉の死に際しひとときわ追慕の念を禁じ難かった如行らが百箇日追善に大垣に芭蕉塚を築いて発企した追善集である。芭蕉の同地方での旅の句などを収録、芭蕉伝記に資する点にも本書の意義は大きい。書名は自跋によれば、その生涯を旅に生き旅に死んだ芭蕉の、死出の旅路も安らかなるようにとの意味をこめたものである。

熱 田 鐵 管 物 語

芭蕉他界の翌元禄八年に編まれた追善集の一である。尾張蕉門は蕉門形成史の中で江戸・大垣に次ぐ早期の成立で、貞享元・二年にわたる『野晒紀行』の芭蕉が往還ともに当地に立寄ったことに端を発している。中でも貞享元年にいち早く『冬の日』を発表した名古屋の荷兮一派がその後も活発な活動を展開して名を挙げたが、芭蕉との結びつきから言えば熱田の桐葉一派が最も早く、桐葉の芭蕉入門は天和年中のことで、大垣の谷木因の幹旋により、初めは江戸に句稿を送って添削を受けたのであるが、貞享元年十月、野晒行脚の芭蕉が木因を訪うた折、木因は自ら案内に立って熱田で両者を初対面させた。名古屋で『冬の日』が巻かれる以前のことである。この折の熱田逗留は月余に亘り、翌春帰東の際も一句を越えて留まり、さらに貞享四、五年の『笈の小文』の行脚にも往還ともに立寄るなど、ここ数年の芭蕉の熱田訪問は当地俳人を最も歓喜させ影響するところがあった。本書はまさしくその時期の俳事を録した点に価値があり、安永四年に晩台によって公けにされた『熱田三歌仙』と共に、芭蕉と熱田とを知る絶好の資料である。後半は出版当時の熱田俳壇衆の作品を収録している。小説風に趣向した全篇の構成は鈴木氏東藤の作で、板下は桐葉である。

芭蕉庵小文庫

史邦・中村荒右衛門はもと尾張犬山で春庵と号した医師で、のち京に移住し、『猿蓑』時代には仙洞御所与力を勤めながら去来・凡兆・丈草らと親交を結び、芭蕉にも深く親炙しつつ少数精鋭の京蕉門の一人として名を挙げた。だが勤務上の失態か何かで浪人して元禄六年七月江戸に下って以後の史邦は、なぜか頗る精彩を欠き、芭蕉没後は山店・嵐竹ら二流江戸蕉門と親交して杉風・其角・嵐雪ら主流の実力者とはとうとうとしく、小さく孤立していった憾があり、元禄九年刊の本集の集面にそれが如実に現われている。しかしそうした俳壇的事情を別にして言えば、未発表の芭蕉の遺文・遺句を極めて豊富に収録したことは、本集の史的価値を大いに高からしめ、遺文九章、うち「石臼之讃」は越人作を誤っているが、他は本集によって世に知られた貴重なものばかりで、発句七十七章の過半以上と歌仙二巻もまた同様である。春部巻初の史邦の文によれば、彼は師芭蕉から種々形見の品を貰っているが、右の資料も恐らく彼が大事に秘蔵したもので、それを世に伝えるところに本集の意図があったことは、その題号によっても明らかだと言える。

末若葉

上巻は其角が新意匠の三点印「花影上欄干」「新月色」「廻雪」を以て点した門下の独吟歌仙十巻である。俳巻の点は昔は墨書きで該当句の頭から斜線一筋を引く平点と二重引きの長点とで示されたが、その後次第に点者銘々の工夫で複雑なものを生じ、元禄になると各独自の意匠による文字や図を刻した印判を該当句に押すことが流行しだした。其角はこの点印を使った先駆者で、『元禄三年「物見車」』には「定推稿」「棹舌」の二点印が見える。上記の三点印は本書刊行の元禄十年から使いはじめた新工夫のもので、巻頭「歌仙了解弁」はその主旨を説いている。なお独吟歌仙十巻は前年刊行『若葉合』の門人独吟十歌仙と合わせて、延宝八年の『桃青独吟廿歌仙』の跡を追うことを意図したものであり、其角一派の新しい意気込みが看取される。下巻は連句・文章若干を交えるが発句集で、巻尾に去来の「贈晋涉川先生書」を公開している。去来の文は其角が師風の流行に従わざるを遺憾とした一種の諫言状であつたが、其角はその去来原文を所々切除し若干の字句修正も加えて本書の跋の形に整形したので、其角の自力独行を可とする芭蕉の言に重点が移行した形になっている（『菊の香』参照）。刊行はこの去来跋の日付、元禄十年五月二日から近いころと考えられる。

菊の香

京都の医、伊藤玄恕、俳号風国は去来系の俳人で、前年、蕉門句集『初蟬』を出版したが、誤脱粗漏があつて、許六に厳しく批判された（『俳諧問答』）。風国は自ら前集の訂正の意図をもつて本集を編んだものである。しかし人を睥睨する傾向ある許六は他の俳人の撰著とともに本集に対しても難を挟み、しかも、その「俳諧自賛之論」（『俳諧問答』）に、「風国は去先生（注、去来）の引廻し給ふ俳友と、皆人しれり。集作る時、先生内見なき事はあるまじと察せり」などと、間接には去来の手落ちであるかの如き口吻も洩らしている。一方、風国は同じ年、本集に先んじて出た其角の『末若葉』が、其角宛の去来の諫言状を其角自身に都合よく修正し、跋として採録した一文を、そのまま『末若葉』から本集に転載し、それに去来の原文を並記して見せ、暗に其角のやり方を難ずる態度に出たことは、芭蕉没後の蕉門内部における対人関係が窺われ、俳壇史的に興味ある問題を提供するものと言えよう。

陸奥衛

編者桃隣は元禄四年十月、芭蕉が細道行脚から三年ぶりで江戸に帰東の際同伴、初めて江戸に移住した芭蕉親縁関係の門人である。彼が生計のため点者生活に身を置くことを芭蕉は憐みながらも、その人物の実直さに、其角・杉風らのうしろ立てあるのを喜ぶ心中をもらし（付、元禄五年五月七日、去来宛書簡）、また桃隣の作風が「中ば愚風（注、芭蕉風）」に心をよせ、所々点取口を交え「はかばかしくもないが、渠猶口過（注、生計）」を宗とするゆへ、堪忍の部の能方（よき）に「入れられると許六に報じたり（元禄七年二月、廿五日付書簡）」、俗俳の前句付の利得に桃隣が迷うことのないよう戒めたり（付、元禄七年六月三日、猪兵衛宛書簡）、桃隣が子珊・杉風らと試みた『別座鋪』（元禄七年五月）以来、彼の手筋が上達したとの上方での好評を喜び伝えるなど（付、元禄七年九月十日、杉風宛書簡）、何かと細かい心づかいを示している。この深い師恩に感じた桃隣が芭蕉三回忌の年に当たる元禄九年三月十七日江戸を出発、七月帰着まで師の奥羽行脚の跡を追って手向草としたので、採って書名とした。その名所・遺跡の状況、道のり等を实地に詳しく記録する点、『奥の細道』研究上の一資料たり得る。ただし、本集に収録の連句・発句には其角・嵐雪系や沾徳・不角・調和・立志ら他門の江戸俳人もまじり、芭蕉没後における江戸俳壇の異風の行き方を示すものが看取される。

韻塞

李由は格式高い近江平田村（現、彦根市）の浄土真宗西本願寺派光明遍照寺（通称、明照寺）十四世の住職、許六は彦根藩士、ともに風雅文事に交わること二十余年の親友で湖東蕉門の中心人物。元禄九年芭蕉三回忌を迎え、亡師追慕の念に堪えず、早くも芭蕉門下の指導者を失い、それぞれ是非を争うきざしを悲しみ、両者協力して編んだのが本集で、許六の処女撰集でもあった。これより『篇突』（元禄十一年刊）、『字陀法師』（元禄十一年刊）と相ついで許六との共撰に成る書を出版して、彦根俳壇の活発な動きを示した。元禄六年四月、江戸在勤の許六が彦根へ帰藩するに当たって与えた芭蕉のかの「許六離別ノ詞」（柴門）を収録する点でも本集は世に著聞する。

伊勢新百韵

伊勢山田の団友斉、岩田涼菟は、芭蕉七部集には『続猿蓑』に、「粟がらの小家作らむ松の中」のわずか一句が入集を見るだけで、

芭蕉生前の交渉は薄かったらしいが、芭蕉没後、江戸に出て其角らに接近し、支考が元禄七・八年山田に結庵するや両者はとくに交渉を深めたもののようである。本集は平明輕妙を特色とする彼の発句により、涼菟門の乙由はじめ伊勢連中と支考が加わって卷いた七吟百韻一卷だけを収める小冊ではあるが、「花は今星のひかりに咲揃ひ／新百韻の柳うぐひす」と巻き納め、早くも元禄十一年、芭蕉没後の俳壇に伊勢風なる新風を提唱せんとする意図を示したものと見て注目される。支考が本集に關し、『阿難話』（正徳）の序に、「冬の日・春の日より曠野・猿蓑に、三変して炭俵・続猿の変化にとゞまりたるが、その後は新百韻に詞の華さきて云々」と、俳風の展開を説くところからもそれは察せられよう。

まつのなみ

大阪蕉門は芭蕉の晩年に至ってやっと発足したばかりだが、初期の之道（諷竹）・車庸・酒堂に加えて、その後舎羅・芙蓉・三惟・天垂らの活動家を生み、西国交通の要衝たる地の便もあって西国俳人との交渉も深まり、元禄十年代には毎年幾つもの撰集を出す活発さを呈した。元禄十五年車庸撰『まつのなみ』もその一例である。芭蕉発句を巻頭とする秋部を第一に、冬部・春部の順で夏は略し、各部に発句と連句を配しており、中国・四国・九州俳人の多いのも、当時の大阪蕉門の交渉状態を反映したものと見える。なお、鳥落人（惟然）の序は彼一流の無技巧・無分別主義の主張で、且つ本集は全体的に惟然風の影響がかなり強く、惟然風拡散の状況を知る一資料ともなう。

二えふ集

惟然・広瀬源之丞は芭蕉生存中の元禄七年に『藤の実』を撰してよく師風を宣揚しえた。だがその後は、「当時の俳諧は工夫を日比に積んで句にのぞみてはたゞ氣先を以て吐出すべし。或は、俳諧は無分別なるに高みあり」（『俳諧問答』）と言った芭蕉のたまの俳談を、自己流に皮相的に理解して、やがて俳諧の無分別・無技巧・無法則主義を唱えた結果は、いきおい用語への入念の否定と日常生活語の多用に走って、いわゆる口語調俳諧へと急進した。元禄十年代は、惟然持ち前の放浪行脚と行く先々での吹聴（ふいちやう）によって「惟然坊風」の名で一新風と認められつつ、俳壇の方々に同調者が続出した。『二えふ集』はその最盛期の集で、天地二卷、天は元禄十五年、地は十六年と二度に分けて出版された（井筒屋『詳譜』書籍目録）。惟然は十五年春から秋に亘って播州・備州・作州・伯耆までも放浪した

が、天巻はその折の収獲を多く収めて旅の記念集の意味も持ち、安積周仙誠齋の「詠諧非_レ芸」は惟然の俳諧観をよく伝えている。地巻にも旅中の関係作品を含むが、概ねは旅後京津の間に在って得た自他の作を中心に編まれたようである。両巻とも四季の排列順を変えて変化を与えた外は似た形式であるが、特に雑の発句の部を設けたのは彼の主張を示すものであった。

渡鳥集

撰者卯七は蓑田氏、長崎の人で去来の甥に当たり、進んで門人を取ろうとしなかった去来が慈しんだ数少ない愛弟子の一人でもあった。本集の撰に当たっても去来は、卯七が遠国で不便ゆえ発句（昼巻）の集句に大きな助力を与え、連句（夜巻）は元禄十一年から十二年にかけて去来が長崎帰郷の折の作を相当手直しして収めた。その事情は宝永元年五月二十七日付の半残・土芳宛去来書簡によっても知られるごとく、実質的には去来・卯七共撰というべきである。なお、本集の成立は元禄十五年だが、卯七の連衆中に故障が起こったため発刊は三年目の宝永元年に延びた。作風は新奇・洗練ともになく頗る平明であるのは去来晩年の傾向の反映と言えよう。

三正猿

「その後は『新百韵』に詞の華さきて、『白陀羅尼』のやすき所にぞ出らる」（『阿誰序』）と言うごとく、支考は、元禄十七年春、北越にあって、北枝らに美濃派の平明通俗な作風を示して『白陀羅尼』を撰したが、同年夏五月（三月改元して宝永元年）には、伊勢山田に遊んで、涼菟・乙由ら伊勢連中と真・草・行の三体に分けて百韻三巻を興行、本集を撰した。『新百韵』よりさらに平俗的傾向を進め、その第三巻は「花いかに天満宮のおぼしめし 支考／御覧の通り我／＼が春 執筆」と満尾せしめて、ここに支考と伊勢風との提携が見られた。

国の花

『国の花』は巻頭部立目録に一覧されるとおり、美濃国十一郡四十一所、一国の俳人を殆んど挙げて総動員した形の一国だけの大きな俳集である。地方の一国だけでこれほど大掛りな集を成した例は俳壇史上空前絶後であらう。またその編集形式は、国の各地区

ごとの中心人物が撰者となつて撰んだそれぞれ別個の題号を持つ独立の撰集十二部を、「国の花」という総題の下に統一したもので、この趣向も類例を見ない珍しいものである。その全体の音頭を取ったのが山県郡北野生まれの支考である。支考の俳壇勢力扶植とその維持経営の巧妙さはまさに天才的で、元禄年中三十代で早くも全国俳壇の大物たる地位を確保していた。すでに全国各地に獅子門を扶植した彼が故国の人々に向かつて「美濃の集」を作ろうと呼びかけたことは、人々の郷土愛を刺激するに十分であつたらう。支考はそこを読んだ。また支考みずからは巻頭の一集にとどめて全部を独撰するのを避け、各地区の中心人物に撰者の榮を持たせるなど、たとえ一小冊子でも俳集を刊行することが俳人にとって頗る名誉であつた時代、彼はその辺の機微を実に巧みにとらえたといふべきであらう。これで、支考従来の実績に加えて、美濃一国は支考の下にいつそう強固に結束した。撰者のうちには木因・己百ら芭蕉親炙の人や芦文・嘯風ら丈草関係の人もあるが、支考はそれをもこの挙に引き入れた。こうして本集は、いわゆる美濃派の中心地たる美濃の俳壇が支考の下に統一されてゆく姿を最も典型的に示すものとして、重要な意味を持つ。単に宝永元年当時の美濃俳壇を詳細に知る絶好の資料たるのみならず、中には芭蕉（第六・十二）・西鶴（第十二）や丈草・露川といった人々の関係資料その他、俳壇史の主流につながるものまで散見する点でも注目されるものである。刊行は井筒屋『俳諧書籍目録』によれば宝永二年である。

正風彦根鉢

もともと倨傲不遜の性向ある許六が、芭蕉没後二十年に近く、すでに去来・丈草・其角・風雪ら芭蕉直門の高弟らも、盟友李由も没し、ますますその自賛癖を高じさせ、湖東の門人こそ、正風の血脈を継ぐものとし、自ら芭蕉直判の秘伝書を伝授されたと誇号し（自跋）、すべて彦根蕉門一派の作者の句八百余句を収録したもので、地方俳壇の一傾向を見るべき集ではあったが、その作調の高さは必ずしも望むべくもない。当時すでに長い病床生活を続けていた許六は三年後の正徳五年世を去った。

庭竈集

撰者越智越人は、貞享から元禄初年、尾張蕉門の一員として芭蕉とも親しく、華々しく活躍した俳人であるが、荷兮・野水ら名古屋グループの、芭蕉からの離疎とともに、次第に俳事に遠ざかり、元禄末年には全く俳壇から姿を消し、正徳五年、六十歳の老齢で歳旦帳を出して再び尾張享保俳壇に復帰するまでの十数年には謎の空白がある。従つて、本集も『鵲尾冠』（享保二年）・『みつのかほ』

（享保十一年）・『猫の耳』（享保十四年）と相ついで彼が出版した俳諧撰集と一環のもので、そこには共通して、芭蕉在世当時、ことに初期蕉門への懐旧、古典復古趣味と知識的・術学的傾向が著しい。それは享保俳壇に美濃風の一大勢力を張った後期蕉門支考への反撥対抗意識に出でた点もあるかも知れない。この当時、支考の芭蕉追善集『三千化』（享保十年）、『俳諧十論』（享保四年）、『十論為弁抄』（享保十年）等が導火線となって両者の間には激しい論難攻撃が交わされたのである。本集は、巻頭句、芭蕉の「仁徳天皇 叡慮にて賑ふ民の庭竈」に拠って書名としたもので、詠史体・故事・詩題・仏説等の分類による前書付の理知的傾向の発句を上巻に、下巻は越人一派を中心に四季発句、連句を収めるが、総じて享保期俳風一般に通じる低調通俗さを免れるものではなかった。

三日月日記

元禄四年冬、細道の旅から足掛三年ぶりに江戸に帰着した芭蕉は、翌年、杉風ら門人たちの志で深川に建てられた新芭蕉庵に移り、隠士素堂との両吟を楽しみ、仲秋八月には三日月のころから月を賞し、草庵に入り来る人々にも句を勧めて、月の発句のみ五十余句を集め、『芭蕉庵三ヶ月日記』と題した。この草稿本を折から出府した出羽羽黒の図司呂丸が行脚の記念に乞い請けたものが郷里に送付され、今日鶴岡に伝存する。ただし、芭蕉遺状に、伊賀に有りとある『三日月日記』は、なお芭蕉が手許で精撰を続けたものであろうか、しかしその精撰本は現存しない。呂丸は元禄六年京都で客死したが、その後、享保十五年鶴岡の人々の手で、芭蕉の羽黒山の句「涼しさやほの三日月の羽黒山」により、三日月塚を建立した記念に上梓したのが、版本『三日月日記』で、後半は支考門蘆元坊（里紅）の「三日月塚誌」の一文と里紅以下出羽俳人らの連句一卷、支考一派の発句等を収め、美濃派勢力の奥羽北越への浸透を物語っている。

雪満呂気

曾良の芭蕉入門は貞享二年をあまり遡らないころだったらしいが、居を深川の芭蕉庵に近く定めて終始誠実を以て芭蕉の日常に奉仕し、芭蕉また「性隠閑をこのむ」彼の人柄を愛していわゆる「断金」の師弟関係を結んだ。奥の細道随行の『旅日記』や元禄四年のいわゆる『近畿巡遊日記』は曾良の業績として今日あまりにも有名だが、その曾良も生前ついに自ら俳書を出版しなかった。本書は彼の甥周徳が元文二年に彼の遺稿を整理して一書となしたもので、出版はさらに降って天明三年である。しかしすべて貞享三年ご

ろから奥の細道途中までの、曾良自身の手で集められた資料であるだけに、信頼性に富み、また当時の曾良、芭蕉両者の交渉関係をも伝える。細道関係の作品は若干を除いて大部分が『旅日記』『俳諧書留』と重複するので、それらの曾良自筆本の発見せられた今日では本書の資料価値もやや軽くなったが、全編としてはやはり曾良を記念する好篇たるを失わない。なおこの版本『雪満呂気』の原拠となった周徳編の原書も写本で伝わるが、両書を比較すると顕著な相違が若干ある。その一は、原書には元禄十五年・宝永六年の曾良句を含む、細道以後の自他の作品若干を収めるが、版本はそれを全部除外していること、その二は、版本が原書にない細道関係の句文若干を『おくのほそ道』その他から流用編入していること。これは版本の編者が本書を細道関係の書として整えようと意図して原書に手を加えたためと認められる。

(宮本 三郎)

(今 栄蔵)